

# 江戸サブカル紀行

## 八百屋お七と岡山

渡 辺 憲 司

以前から、八百屋お七は日本のサブカルチャーの象徴的人物といってもいいなどと、飲み友達にうそぶいていた私に、岡山の友人から突然電話があった。

「おまえの好きなお七の墓が近所にあるぞ。どうだ、瀬戸内の桜を見がてら、ママカリでいっぱいやろう」

「そんな所にお七の墓があるのか」と半信半疑であったが、桜とママカリの誘惑にのって岡山に行くことにした。

岡山駅から津山行き電車に乗って二十分、電車はお七と同じ年頃の女子高校生でいっぱいであった。いつもの年なら、そろそろ桜が咲き始める頃なのだが、その日は小雪が時折ちらついていた。最寄りの駅は野々口であるが、ここは快速が止まらない。ひとつ津山よりの金川まで行ってそこでタクシーに乗り、十五分ほど山間の道を旭川沿いに

岡山方面へ戻る。

住所は、岡山県御津町野々口小山村。

国道でタクシーを降り見上げると、八百屋お七と大きな看板が目印に掲げられていた。墓は共同墓地の一角、国道からあぜ道をあがった丘の中腹に建てられたブリキの掘立て小屋にある。左側の三角形の石が、お七。右側の長方形のものが吉三郎であるという。国道には御津町文化財保護委員会・御津町教育委員会連名の案内板があり、小屋の墓の上にもかなり古びた案内板がある。教育委員会の案内板によれば、吉三郎がお七の遺骨を持って供養の旅に出この地で亡くなったのを村人が供養したとある。又、小屋の中案内板によれば、「天和三年（一六八三年）江戸品川鈴ヶ森で火刑されたお七の霊を弔うためお七の両親は元禄十

二年（一六九九年）江戸深川回向院へ出開帳中の美作国誕生寺第十五代通誉上人にその位牌と振袖を託し供養を依頼した、お七供養のため全国行脚中の恋人吉三郎は誕生寺を訪れた後当地吉尾の仏生山法道寺でその波瀾に富んだ生涯を閉じた。村人達は二人の霊を祭るためお七、吉三郎の墓を建てたのであります」とある。

案内板にある法道寺は、日蓮宗不受不施派で、寛文六年に寺院淘汰された寺である。その後、『御津郡誌』によれば、この地の禁庄された同派の信徒は地下に潜って信仰を維持し、その中に講門派が形成され、野々口村の小山の人々が八百屋のお七の墓を当村の小字小坂に祀ったという。又、吉三は廻国の途中、お七の振袖の片方を作州誕生寺に置き、次に野々口実成寺に立ち寄り遺骨を葬った。その後、五輪の塔は散逸したため厨子を建て大村氏が祀ったというのである。

お七の墓を建立した背景にはこの地の不受不施派の信仰があったのであろう。不受不施派の人々が如何に苦難に満ちた信仰体験を余儀なくされたかは、ここで説明するまでもないであろう。信仰の自由を奪われた不受不施派の人々はお七の前にぬかずき祈りを捧げていたに違いない。お七の逸話をどれだけ正確に知っていたかはもちろんわからない

いのだが…。

踊り子草が一面に広がるあぜ道を下りながら私は、生月島で見た納戸神の西川祐信風浮世絵を思い出していた。あの浮世絵も隠れキリシタンにとっては、マリアであったのである。隠れキリシタンにとっての浮世絵のマリア像と不受不施派の人々にとつてのお七はどこかで通い合っているのではないかと。

墓の前には新しい花も手向けられている。村の人の話を聞いてみたいと思ったが、あたりには人っ子一人いない。お七の両親が誕生寺の通誉上人に供養を依頼したという案内板の説明も始めて聞いた話である。誕生寺へも行かねばなるまいと先を急ぎ、タクシーに乗った。

運転手さんはこの土地の人のようだ。お七の墓の話聞き出そうとすると先に運転手さんが口を開いた。

「お七つてのは馬鹿な女でしょう。男に会いたいと放火した」

友人が続けた。

「馬鹿な娘よ。親不孝者よ」

私はそれ以上何も話すことがなかった。

たしかに、お七は馬鹿な少女である。罪人である。だが、お七は日本の歴史上もっとも関心を集めた少女である。そ

してこの少女の回りに日本の文化、殊に江戸文化伝承のひとつの形があることもたしかである。私はサブカルチャーというやや粗い編み目を持った網でこれをすくってみたいと思っている。もとより多くのことがこの網から漏れて行くに違いない、だが今につながるサブカルチャーの原石のかけらが残るかもしれない。

金川に戻って、再び津山線で誕生寺へ向かう。誕生寺駅から歩いて十五分ほどで誕生寺。久米郡久米南町里方にある法然上人の誕生地に建てられた古刹である。寺域には誕生椋・片目川・産湯の井戸など法然の伝記や伝説に現れる遺跡が数多く残っている。

山門を入ると、左手に本道の南側に観音堂があり、「大願成就 南無観世音菩薩 中国三十三観音特別霊場 誕生寺お七観音」と記された赤いのぼりがはためいている。堂の中にあるのが慈覚大師の作といわれる聖観世音菩薩、お七観音である。堂の前にはたくさんの絵馬が掛けられ、「厄よけ」「病氣平癒」「受験祈願」「先祖供養」など多様の願いが記されている。

お七はこの地で観音様になった。

観音堂の手前の宝物館には、お七ゆかりの品物が展示され、その中にボロボロになった振袖があった。元禄十二年、

法然上人像の出開帳のため第十五世通誉上人が江戸回向院に向いた際、お七の遺族から供養を依頼され、位牌とともに持ち帰ったものだといわれの品である。上人はこれらの遺品をこの地に持ち帰りねんごろに弔い、その際に火を華に転じ、煙を艶と転じてお七の戒名を「華月妙艶信女」と授与したという。またボロボロになったのは、「大阪での博覧会に出展した際に恋愛成就のお守りとか、お七の容色にあやかりたいなどと肩、袖がちぎりとられたためである」などと、展示ケースの解説は記してある。

\*

私は、展示ケースの前で動けなかった。

友人は一笑に付しながら「こりや偽物だろうな、大阪の博覧会っていうのは万博か…、まさかね」とつぶやいている。もちろん、一九七〇年の大阪万博であろうはずはない。おそらく入場者数、四三〇万人を越えた大阪で開かれた明治三十六年（一九〇三年）の内国勧業博覧会であろうか。奇妙奇天烈なものが展示された博覧会である。お七の振り袖が出し物のひとつになったとしても不思議はないが、大阪では何度も博覧会が開かれているから、確証があるわけではない。（帰京後、慶応大学で講義の余談にこの話をしたら、受講生の朝吹真理子君から、丁寧に内国勧業博覧会

の目録を見たが、岡山県からの出展は日本画のみでそのよ  
うなものはないということを見せてもらった)

私が動けないのは、真偽にとまどったからではない。お  
七伝承の背景に色々のものが立ち上がってきたからである。

まず法然のことである。法然の専修念仏は、戒定慧の三  
学を排して女性に直接布教をした点が特徴のひとつである。  
専修念仏は比叡山から敵視され、さらに後鳥羽法皇の怒り  
をかかった。法然が土佐に流された直接の原因は院の官女を  
門弟が直接出家させたことにあるという。室津の遊女救済  
伝承など、法然と女性救済信仰との結びつきは強い。お七  
の遺族が法然上人ゆかりの出開帳の折りに供養を頼んだと  
いう伝承はこの女性救済の信仰とも結びついているのであ  
ろう。

そして出開帳の場である回向院の存在である。回向院が  
出来たのは、明暦三年、この年江戸で「振袖火事」の名で  
知られる大火があった。死者十万を越え、無縁又引き取り  
手のない死骸が江戸市中に散乱したという。この人々の亡  
骸を葬るために出来たのが回向院である。振袖火事とお七  
の起こした火事とは異なっている。しかし、お七伝承は、  
出開帳・博覧会という大衆の受け手の念仏の中で振袖とリ  
ンクしたのである。私がお七伝承の中に追い求めているの

は、歴史の事実ではない。大衆がお七伝承の何にすがろう  
としたかを見てみたいと思うのである。

長崎市今紺屋町にあり、享保六年八月の銘をもつ、唐金  
塔(市文化財)はかなり大きな立派なものだが、俗に「八  
百屋お七の塔」とも呼ばれるている。これは、享保七年の  
大洪水の死者を祀ったものである。罹災者の信仰の対象と  
なった点では、この唐金塔もあながちお七伝承の一つとし  
て無視は出来まい。

伝承は全国に広がっている。

東京でいえば、文京区白山にある円城寺には、お七が処  
刑された当時の住職が建てた墓があり、命日には供養の催  
しもおこなわれている。町内会の有志が建てた一七〇回忌  
供養塔があり、歌舞伎役者五世岩井半四郎が建立した供養  
塔もある。目黒区の大円寺には、お七地藏尊、これは吉三  
郎が夢枕に立ったお七を供養したものだそうだ。駒込の吉  
祥寺の境内には、お七吉三の比翼塚がある。これは昭和四  
十一年に建てられた新しいもの。ここから中山道を少し進  
むと、ほうろく寺で知られる大円寺、焙烙をかぶった地藏  
尊は、自ら灼熱地獄を味わいながら火あぶりの刑にあった  
お七を供養したものと。首から上の頭、目、鼻の病に靈  
験あらたかと信仰を集めている。

鈴ヶ森の刑場の近くにある、大森の密蔵院のお七地蔵は、高さが一六〇センチほどの大きな石造丸彫りの地藏菩薩立像である。台座に貞享二年の銘があり、お七の三周忌供養のために建てられたという。

私が行った折には住職が留守で見ることが出来なかったが、奈良の大和高田市本郷町の常光寺には、お七の数珠があり、「享保十年（一七二五）十月十四日しち菩提」の銘があるという。ここにも、お七の墓があるが、本堂脇の小さなものである。近くには以前お七川が流れ、この水をぬると、病気が早く治るといふ言い伝えがあるというが、川の位置はわからなかった。

千葉県八千代市萱田の長妙寺の墓は、お七の養母が、鈴ヶ森の刑場から遺骨をもらいうけ、ここに埋葬したというもの。岩手県水沢市の柳町法泉寺には、吉三の墓と云い伝えられる墓とともに、本堂にお七の像を刻んだとされている白粉地藏がある。吉三郎が、出家落飾後、諸国を行脚し、その間いつも背にして歩いたと云われる背丈一メートルほどの可愛らしい木像である。行脚最後の地となったこの寺の本堂に納められたのだそうだ。近くの柳町は近年まで栄えた花街で、その女性達の婦人病や美人祈願に効があったという。訪れた時は本堂修築中。「この白粉地藏も観光

の人寄せになりますかね」と帰りがけに運転手さんから聞かれたが、今は立て看板の案内が出来ているかもしれない。島根県八束郡美保関町美保関の佛谷寺は、開山、聖徳太子、開基行基菩薩という約一二〇〇年前に創建された山陰第二の古刹、日光菩薩立像（国重文）等寺宝も多い、後鳥羽上皇・後醍醐天皇行在所跡としても知られる。この寺の本堂から山道を登ると、かなりの数の赤い旗がはためいていた。お七の恋人、吉三郎（西運）の墓があり、現在では火難除けの祈願所として信仰を集めている。

吉三郎の墓は、東海道島田の宿、街道から少し脇道を入ったところにもあり、「関川庵 お七の恋人吉三郎の墓」と木の看板が立っている。お七を供養して行脚の途中島田の宿で病死したのを弔ったものだろう。

吉三郎が死んだ場所としては、秋田、羽後の円福寺にも伝承があるそうだし、島根県平田市の鰐淵寺にもここで行き倒れになったという吉三郎の墓があるそうだがこれらは確認していない。

未だ訪れてはいないが、四国、大興寺の仁王像の首は、吉三郎がお七の冥福を祈って四国八十八ヶ所の順拝の旅の途中、ここに立ち寄り山門の仁王像の首が傷んでいるのに気づき、お七の供養のためにその首を自分の背中に背負っ

て四国中を勧進して歩き、基金を集めて作られたものだそうだ。お七の供養塔は、山口市吉敷の龍藏寺にもあり（こは何度も訪れたなつかしい所だが、そんな話は聞かなかつた）、他に、石川県七尾市長寿寺にも供養塔があると聞く。又、徳島市吉野本町の万福寺には、戦前まで境内に彼女の霊を慰めるお七金仏が安置されていたが、大戦中に供出され、現在はお七地蔵として再建されているとも聞く。

全国に散在するお七吉三郎の伝承をどのように理解すべきなのか。一筋縄ではいくまいが、都市伝説の地方波及の問題も考えねばなるまい。

享和二年（一八〇二）江戸で風邪が大流行したに流行した。名づけてお七風邪。羽後の円福寺の墓には、感冒流行の折に詣で祈願すると本復するとの伝承もある。悲劇的な死を迎えたお七ゆかりの信仰は、疫病神を払う御霊信仰のことにも思い当たる。

〈炎の中の聖少女幻想…ジャンヌダルク〉、とお七を重ねた、本田和子氏の論文『少女浮遊』一九八六年 青土社）も浮かぶ。

連想の糸は絡み合いながら、もやもやと分母のような、公約数のようなものが立ち上がってくるような気がした。お七…。江戸のサブカルチャー。

\*

「行くぞ。そんな偽物じっくり見てないで、津山の遊廓跡にちよつといい仕舞屋風のスナックがまだやっている。そこで一杯やろう」という声に促されて誕生寺をあとにした。スナックはカラオケでガンガンしていた。

仕舞屋の落ち着きなどはない。歌はへたな「夜桜お七」。お七の話をしていると、「私の小さい時にはこの辺りにものぞきからくりが来てましたよ」とママ？若く見えたが七十を越えているそうだ。

乱歩。『押絵と旅する男』で、のぞきからくりの中のお七を抱きしめる姿も浮かぶ。

「柳亭痴楽の八百屋お七を聞いたことがあるか」と友人。手伝いの若い娘さんも会話に乗ってくる。

「ガラスの仮面見た？」  
美内すずえさんの漫画である。

「マヤの安達祐実かわいいわね」  
テレビでは、主人公北島マヤを安達祐実が演じた。劇中で八百屋お七が演じられたのである。

「お七は酒のつまみにいいね」と友人。  
酒とお七の話は終わらない。